

活用順調！侯野別邸

侯野別邸は、佐藤秀三の代表的作品であるとともに昭和前期モダニズムにおけるハーフティンバー・スタイルを基調とした和洋折衷住宅である。また、主屋棟・南棟・事務棟をY字型に配置した棟構成にも特徴があり、ダイニングルームを中心としたコンパクトなプランニングに大邸宅建築における平面計画が示されている。建築年は昭和14(1939)年。

平成16(2004)年には国の重要文化財に指定されるも火災により建物の大部分が焼失。国の文化財指定解除後に市の公園施設として再建された。主な部屋の造りや仕上げはオリジナルのものを忠実に再現し、平成29(2017)年に横浜市認定歴史的建造物となった。

主屋が位置する侯野別邸庭園は、戸塚区の南端にあり敷地面積が5.8haという広大な公園。園内は別邸のある内苑と外苑に分けられ、外苑では都会の喧騒を忘れさせる森閑とした雰囲気や四季折々の花木・草花を楽しむことができる。



内苑の緑とヒメヒオウギサイゼン



ハーブコンサートの様子



別邸の外観

歴史を生かしたまちづくり相談室 相談受付中!

時代の変化と共に、横浜を代表する歴史的建造物の多くが次々と姿を消してきた。特に、個人が歴史的建造物を所有し続けることは、日常的な修繕や改修等に大きなコストがかかり、相続等を契機に売却、取り壊される事象が後を絶たない。そこで、少しでも所有者の不安に寄り添い、歴史的建造物を後世へ残す一助になれるかという思いから、平成26(2014)年に「歴史を生かしたまちづくり相談室」を開設した。

歴史的建造物の価値を知りたい、改修したい、残したいとの市民等の皆様からご相談を受け即座に専門家、横浜市都市デザイン室の担当者、公益社団法人横浜歴史資産調査会の担当者が集い、対応策を考え、現地に向かうことにした。横浜市内はもとより、周辺他都市からのご相談にも対応している。

これまでに、個人の所有する歴史的建造物の相続や維持管理に関するご相談のほか、企業からも歴史を生かしたまちづくりへの連携等に関するご相談をいただいている。

ご相談いただいたことがきっかけで認定歴史的建造物となり、外観改修工事への助成を行っている事例もある。相談室の存在が、所有者ほか皆様の歴史的建造物の価値や今後の対応に対する理解を深め、歴史的建造物が横浜の宝として将来に渡って残される一助となれば幸いです。

どなたからのご相談でも無料で受け付けている。郵送、Eメール、ファクシミリによるご相談の他、毎週水曜日(午前10時から午後3時まで)には、電話による相談も受け付けている。



ご相談から歴史的建造物の認定に至った近代和風建築

「歴史を生かしたまちづくり相談室」受付中! 皆様からのご相談をお待ちしています。

【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテージ)内
「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX : 045-651-1730 E-mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp

公益社団法人横浜歴史資産調査会 令和元年度の取り組み

Y O K O H A M A H E R I T A G E

「シルクロード・ネットワーク・南砺フォーラム 2019」の開催

ヨコハマヘリテージが中心となって設立した、絹の歴史と文化を守り育てる地域や関係者が集うシルクロード・ネットワーク協議会のフォーラムは、平成27(2015)年横浜市から始まり、新庄市、福島市、鶴岡市と開催を重ね、5回目となる本年度は富山県南砺市において、6月22日(土)～23日(日)に開催されました。主催はヨコハマヘリテージとNPO法人街・建築・文化再生集団(通称RAC、前橋市)、共催は南砺市。

南砺市は、合掌造りの五箇山が養蚕、砺波平野の城端町が絹織物、彫刻の町井波が蚕種と、まさに絹産業の拠点と言えます。22日の見学会は各町を巡り、絹文化を体感。フォーラムは、田中幹夫南砺市長のご挨拶に始まり、「城端の織物の歴史」、「井波の町並み保存」、「井波の町家再生」をテーマにした講演や、全国各地から絹文化を生かしたまちづくりの発表がありました。これを受けて参加者皆でシンポジウムが行われ、城端の絹文化の継承や井波の町並みを伝統的建造物群保存地区に導く方針が示されました。



五箇山相倉集落(世界文化遺産)

「第22回 全国近代化遺産活用連絡協議会鳥取大会」に参加

我が国の近代化に貢献した産業、交通、土木遺産の保存活用を進める全国組織である全国近代化遺産活用連絡協議会にヨコハマヘリテージは今年度から加盟し、7月24日(水)～26日(金)に開催された同協議会の総会、講演会、見学会に参加しました。同協議会は、平成8(1996)年に設立され「活用なくして保存なし」のスローガンのもと、全国の都道府県、関係市町村や団体、企業が加盟し、毎年総会等を開催しています。総会、講演会を順調に終え、見学会は「旧美敷水源地下水施設」(国指定重要文化財)。荒廃していた同地を鳥取市が復元し公開に至っており、山峡の地に洋風のポンプ小屋とろ過池が点在し、見事な歴史的景観を形成しています。山陰本線餘部橋梁跡なども見学し、盛況のうちに閉会しました。



旧美敷水源地下水施設(国指定重要文化財)

「日本鉄道保存協会総会 2019 長浜大会」の開催

歴史的鉄道車両や施設構造物、関連資料の保存活用を推進する全国組織である「日本鉄道保存協会」にヨコハマヘリテージ

は今年度から加盟し、9月26日(木)～27日(金)、長浜市、敦賀市、南越前町で開催された同協会の総会、講演・シンポジウム、見学会に参加しました。

当日は、全国からJRを始め加盟団体約90名が出席し、藤井勇治長浜市長のご挨拶のもと総会等が始まりました。開催地の長浜市をはじめ3市町の自治体は、旧北陸本線に残る近代化遺産としての鉄道遺産を保存活用するために協議会を設立しました。鉄道遺産をまちづくりや地域活性化に生かしています。横浜は令和4(2022)年の鉄道開業150周年を間近に控えていますので、多めに参考となります。

なお、同協会の代表幹事団体は公益財団法人交通協力会が長年務めてきましたが、事情によりその役目から降りることとなり、ヨコハマヘリテージがその後を引き継ぐこととなりました。鉄道発祥の地 横浜として活動が注目されます。



小刀根トンネル(敦賀市)

「第1回 旧湘南電鉄瀬戸変電所保存活用委員会」の開催

京急電鉄金沢八景駅に隣接する昭和4(1929)年に建造された「旧湘南電鉄(京急電鉄の前身)瀬戸変電所」(鉄骨コンクリート製)の将来にわたる保存活用を目指して、京急電鉄のご協力のもと、横浜市都市デザイン室とヨコハマヘリテージが連携して現況調査を行ってきました。そしてこのたび、具体的な保存活用計画策定に向けた委員会をヨコハマヘリテージの自主事業として設置し、10月2日(水)京急電鉄本社会議室で開催しました。

当日は、これまでの経緯やコンクリート成分調査、耐震、振動調査報告や具体的な保存活用案が話し合われました。同委員会は今年度中にあと2回の開催を予定しています。

委員会のメンバーは、委員長に後藤治氏(工学院大学理事長)、委員に西澤英和氏(関西大学教授)、田村雅紀氏(工学院大学教授)、小野田滋氏(公益財団法人鉄道総合技術研究所情報管理部担当部長)、山本博士氏(公益社団法人神奈川台場地域活性化推進協会代表理事)、梶山祐実氏(横浜市都市整備局都市デザイン室長)、吉田鋼市氏(横浜国立大学名誉教授、公益社団法人横浜歴史資産調査会副会長)です。(順不同)



関西大学西澤研究室らによる耐震振動調査の様相



撮影：米山淳一

横浜港口から東京湾頭を照らした外防波堤灯台

関東学院大学教授・公益社団法人 横浜歴史資産調査会社員 中藤誠二

横浜外防波堤北灯台及び南灯台は、横浜港の第3期拡張工事の中で立案され、昭和10(1935)年に建造されたものである。横浜港の入り口に赤白2つのペアで立つ。港の奥に向かって右側の北灯台が赤色、左側の南灯台が白色をしている。平成31(2019)年3月に光波標識としては必要性が低下したとして廃止、消灯された。なお、さらに港の奥には、第1次横浜築港工事において明治29(1896)年に建設された同本の横浜北水堤灯台があり、今なお現役である。

灯塔は遠くから見ると外壁はコンクリートのように見えるが、近づくると小さなタイルがきめ細かい外面を形成していることがわかる。海洋に建設される灯台のため、波や潮風に含まれる塩分による鉄筋コンクリートの腐食から守る意図もあったと考えられる。塔内のらせん階段はコンクリート製だが、灯室へ上るところは鋳鉄となっている。階段は北灯台は左回り、南灯台は右回りになっている。灯塔の中心には、分銅を垂らすための円柱状の空間(分銅筒)が用意されていた。南北の灯台は基本的に対称をなしているが、内部の部屋の仕切りや配置は異なっている。港湾灯台に居住用の付属建屋があるのも珍

しい。円錐状の灯るう屋根の愛らしさに加えて、直線状の防波堤に立つ円筒状の灯台と直方体の建屋の組み合わせは形としても美しく、横浜港のゲートとして存在感を示している。昭和10年の点灯開始当初より看守員の常駐はなかったが、昭和31(1956)年から昭和49(1974)年にかけて北灯台に信号所が併設されていた際には常駐職員が配置されていたという。

初点灯時の灯器は、通信省燈台局横浜工場の技手であった岡本一郎が外国製のものをベースに改良したアセチレンガス急閃光器で、岡本式閃光器と呼ばれる。また同じく岡本一郎が開発した岡本式日光弁が、建設当時のものであるか不明だが、現在も北灯台の屋根にある。日光弁は灯台を自動的に点灯させるセンサーとして機能していた。また、昭和63(1988)年の改修時まで存在していた中間踊り場は2つの灯台が向き合う方向にあった。中間踊り場のある灯台は珍しく、航行する船を監視したり、指示を送ったりするのを目的としたものと考えられる。

灯台竣工前の昭和9(1934)年10月に内務省横浜土木出張所が発行した「横浜港と其修築」には、外防波堤の構築に関する技術的な内容が綴られた最後に「港口に新

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞
Y O K O H A M A

第35号

令和元[2019]年
11月30日発行

Since 1989

震災復興橋梁「吉野橋」、歴史的建造物に認定!

石張りのアーチが魅力的な震災復興橋梁「吉野橋」が、平成31(2019)年3月に歴史的建造物として認定された。南区桜まつりにあわせて認定の記念に橋台をライトアップすることで、吉野橋の幻想的な姿を桜漂う水面に浮かび上がらせた。

横浜市営地下鉄吉野町駅から蒔田公園を目指して鎌倉街道を歩くと、中村川にかかる「吉野橋」の親柱が見えてくる。橋を渡るだけでは気づかないが、是非、吉野橋の隣にある霞谷橋から眺めていただきたい。左右の親柱から吉野橋の特徴であるアーチ型の橋台まで、同一の石張りで統一されており、その荘厳な姿に驚く。「復興型」とよばれる吉野橋の構造は、震災復興橋梁のなかでも、特に地質が脆弱な現場に対して耐震性を持たせるための構造である。川の中に橋台があるため、通水や船舶の航行を確保するためにアーチ型にし、空間を確保している。現在は

SUP(サップ)等の水上アクティビティで水辺からも親むことができる。震災復興橋梁とは、大正12(1923)年の関東大震災からの復興のために建設された橋梁のことで、吉野橋も震災後の大正15(1926)年、内務省復興局の設計、清水組(現清水建設)の施工により建造された。震災復興橋梁は横浜市内には178橋あったが、現存しているのは40橋のみである。中村川の他の震災復興橋梁は首都高速の建設に伴う架け替えのため現存しておらず、吉野橋は震災

復興からの都市発展の過程を偲ぶことができる貴重な景観構成要素となっている。平成31(2019)年3月31日には、横浜市都市デザイン室が実験的に橋のライト

アップを行った。「吉野橋の夜の景観づくり」として、桜まつりの来場者や地域住民に日常とは異なる幻想的な吉野橋をアピールした。



同一の石張りで統一された姿が美しい



一夜限りの特別な吉野橋(ライトアップ時)

写真映えする土木産業遺産特集

最近ではインフラの独特な形状や美しさが再認識され、「インスタ映え」なら

ぬ「インフラ映え」として密かなブームになっています。一方、開港を起点に

都市として発展してきた横浜では、港湾施設や水道、道路、橋梁、下水道など、近代都市としてのインフラストラクチャーが全国に先駆けてつくり出されてきました。

そこで横浜の「歴史インフラ映え」スポットを紹介します。様々な歴史インフラがあることが横浜の特徴ですので、ぜひ自分好みのスポットを探し、SNSなどで発信してください!



横浜港ハンマーヘッドクレーン(中区新港2丁目)

1914年に新港ふ頭に整備された英国製の国内初の港湾荷役専用クレーン。日本のクレーンによる荷役の先駆けて横浜港のシンボリック的存在。2019年10月に開業した複合施設「横浜ハンマーヘッド」に合わせライトアップも開始された。土木学会選奨土木遺産。



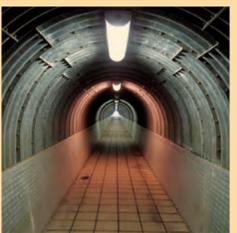
霞橋(西区霞ヶ丘・南区三春台)

鉄筋コンクリートのアーチ陸橋。現在の霞橋は、震災後に建造された2代目であり、震災復興橋梁の代表作。初代霞橋は路面電車を通すために開削した尾根道をつなぐ目的で建設された。重厚感があり落ち着いた雰囲気。1928年建造。



旧平沼専蔵別邸 亀甲積擁壁及び煉瓦塀(西区老松町)

高い施工精度などから横浜屈指の芸術的石積擁壁と称される。豪商、平沼専蔵の別邸として明治時代中期に建造。関東大震災でも損傷せず、戦争により建物を焼失したものの、創建当時の風格を今に残している。



大原隧道(南区清水が丘)

関東大震災を機に蒔田磯子方面へ水道給水地域を拡張するために計画された水道用隧道。現役の水道施設であり、歩行者専用道路でもある。内部は連続的・反復的で何れ無限の奥行き感を感じさせる空間であり、最近ではプロモーションビデオやロケなどでも使われている。



東横線跡地遊歩道(西区桜木町1丁目)

1932年に開通し、2004年に廃線となった東急東横線横浜駅～桜木町駅間の高架橋について、2019年に桜木町駅から紅葉坂下までが遊歩道としてついに通行可能に。眼前を通る電車、1キロ以上まっすぐ続く未整備部分など他では見られない景色が味わえる。

番外編

歴史を生かしたまちづくりセミナー Vol.42

野毛山のヒミツ ~どうしてハマっ子の憩いの場となったのか?~

令和元(2019)年8月4日(日)15時から約2時間半、横浜市中心図書館B1Fホールにおいて「野毛山のヒミツ~どうしてハマっ子の憩いの場となったのか?~」と題してセミナーが開催された。プログラムは2名による講演と野毛山公園及び野毛山旧配水池を巡るミニツアーの2部構成で行われた。参加者は約80名であった。

セミナーは公益社団法人横浜歴史資産調査会社員の内山哲久氏による司会で進行し、公益社団法人横浜歴史資産調査会

会長の宮村忠氏、横浜市野毛山動物園長の久保良法氏による挨拶があり、次いで第1部の講演へと移る。

初めに横浜都市発展記念館副館長の青木祐介氏から「野毛山はどうしてハマっ子の憩いの場になったのか?」というテーマで講演が行われた。同氏からは、横浜が開港してから戦後までの歴史を概観し、特に野毛山という場所が開港時からいかに重要な場所、しかも様々な姿を変え、そして市民の憩いの場となってきたのかをスライドを駆使して説明された。

続いて「野毛山配水池の歴史」というテーマで、横浜市水道局中村水道事務所長の寺井宏治氏から、配水池という語句の説明と近代水道の歴史、そして野毛

配水池の歴史と現状について説明がなされた。しかも野毛山という場所は近代水道史においても重要な場所であることが強調された。

講演終了に際し、主催者でもある横浜市都市整備局都市デザイン室長の梶山祐実氏から挨拶と第2部のミニツアーに向



旧配水池でのミニツアー(水道局)

けての連絡事項がなされた。

第2部の「野毛山公園と野毛山旧配水池を巡るミニツアー」では、炎天下にもかかわらず沢山の参加者が野毛山を歩いた。にしゅシティガイドグループによる野毛山公園の史跡解説ガイド、横浜市水道局の方々による普段は入れない野毛山旧配水池の現地解説とご案内、そしてその他様々な方々のご協力のもとスムーズに行われ、参加者の喜びの顔が見えられた。セミナーは終了した。



野毛山公園でのミニツアー(にしゅシティガイドグループ)

歴史的景観の輝きを取り戻した建造物

都筑区川和町、旧街道沿いの小高い丘上の屋敷地に建つ「中山恒三郎家店蔵及び書院」のうち、商家建築である店蔵について外壁等の外観保全工事が平成30(2018)年に行われた。戦時中に空襲対策で行われた墨塗りのために黒い外壁となっていたが、壁の補修工事のうえで白漆喰塗りの化粧を施され、創建当初の白く輝く姿を取り戻した。

現代的なビルが立ち並ぶビジネス街の関内地区において、大正15(1926)年築の「横浜指路教会」は歴史を感じさせる視覚的オ

アシスとなっている。近年は外壁の傷みや幹線道路沿いの立地ゆえの排ガスによる汚れ等が外観上の魅力を損なっていた。平成30(2018)年に外壁や玄関レリーフ等の外観保全工事を行い、また全灯具をLED化したことで、優れた歴史的景観のランドマークとして甦った。



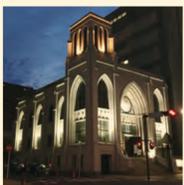
横浜指路教会の正面外観



漆喰壁が輝く中山恒三郎家の店蔵



中山恒三郎家の店蔵の左官工事



LEDで演出された横浜指路教会

見つけよう、広げよう!開港都市の可能性 ~開港5都市景観まちづくり会議2019横浜大会~

開港5都市景観まちづくり会議は、開港の地となった神戸・長崎・新潟・函館・横浜の市民が集まり、開港都市ならではの歴史・文化などを生かした景観・まちづくりについて考え、交流を深める会議である。平成5(1993)年に神戸で始まり、5都市持ち回りで開催しており、平成26(2014)年以来、5年ぶりの横浜開催となった。

2019横浜大会は「見つけよう、広げよう!開港都市の可能性」というテーマで令和元(2019)年11月1日~3日の3日間開催。5都市から約250名の参加があった。今までは商店街を中心とした市民団体で実行委員会を構成していたが、今回は横浜では初の試みとして、「2019横浜大会運営メンバー」を広く公募。今まで携わっていた市民団体と、新たな団体や個人を加えて実行委員会とし、チャレンジ的な企画が組まれた。

初日のシンポジウムでは、25年間の振り返りとして、会議が始まったきっかけや、各都市が行ってきたまちづくりに関する発表。『これからの開港5都市景観まちづくり会議の可能性』について、会場を巻き込んで議論した。分科会は全部で5つ。道と地形~営み~緑から山手地区の景観と魅力を考えて『①洋館だけじゃない、山手の魅力発信』。象の鼻パークやハンマーヘッドクレーンなどの歴史遺構や著しく変化する臨海部を視察した『②海から見た横浜』。『③地



分科会②:船上から横浜港を視察



初日のシンポジウム後の集合写真

域に開かれたコミュニティ拠点の創り方』では、若手が運営する拠点と、高い公共性を持った開港期の横浜商人が自邸の庭を開放していた例である三溪園を視察し、拠点の在り方を考えた。『④開港を支えた横浜郊外の活かし方を考える』という開港エリアを飛び出した分科会では、養蚕業に関係する長屋門公園、中丸家長屋門等を視察し、地産地消について学んだ。また、『⑤景観(まち)を知ることで好きになる』というテーマでは開港を代表する日本大通りを軸に、「市民がガイドを行う」という体験から身近な景観を考えた。

他都市参加者からは、「5港のネットワークを実感できた。今回インプットしたことを地元でしっかりアウトプットし、今後も継続して参加したい」などの声が聞かれ、運営メンバーの坂口祐太さんは、「横浜の歴史を伝えると共に、現在の若手の活動を見てもらい、他都市との比較や議論ができて参考になった」と語った。25年目の節目にふさわしい充実した内容であると共に、今後につながる議題提供を行う会議となった。



分科会④:中丸家長屋門をご当主から説明

戦後モダニズム建築の保存活用

横浜市庁舎は、村野藤吾(1891-1984)率いる村野・森建築事務所によって設計され、昭和34(1959)年に竣工した。高層の行政棟と低層の市会棟を2階吹抜けの「市民広間」でつなぐ矩形の釣り針型の構成で、村野の市庁舎建築を代表するものといえる。

平成31(2019)年1月から公募を実施していた「現市庁舎街区活用事業」について3件の応募があり、横浜市現市庁舎街区等活用事業審査委員会において審査が行われ、横浜市が答申を受領した。横浜市はこの答申を踏まえ、令和元(2019)年9月に国際的な産学連携、観光・集客というテーマに沿った地区の賑わいと活性化の核づくり等の観点から、最も優れた提案を行った応募者を事業予定者として決定した。

公募に際し、横浜市は提案の質を高め

るための手がかりとなることを意図して「関内駅周辺地区エリアコンセプトブック」を策定し、地区の新たな方向性を示すとともに、現市庁舎街区の活用を期待するものとして複数の望ましい活用イメージの例を示していた。

横浜市庁舎の行政棟を保存活用した、横浜探訪の拠点「レガシーホテル」などが計画され、街並みと調和し、賑わいの源泉となる関内・関外地区の新たなシンボルが、令和7(2025)年に誕生することとなる。



横浜市庁舎

祝・吉田鋼市氏 第68回 横浜文化賞受賞!

横浜市の最高顕彰であり、文化の発展に尽力し、その功績が顕著な方々に対して贈られる横浜文化賞を吉田



鋼市氏(1947)年が受賞された。吉田鋼市氏は、赤レンガ倉庫や横浜生糸検査所など、著名な歴史的建造物はもちろん、地域の歴史や生活、経済に関わる多様な建築まで、横浜のみならず県内外の幅広い地域を対象に、専門の見地に基づき、建造物の保存と活用に尽力されている。受賞により横浜の歴史的景観の保全に光が当てられたことにも、吉田氏に感謝申し上げます。

吉田鋼市氏 プロフィール

昭和22(1947)年生まれ。横浜国立大学名誉教授、公益社団法人横浜歴史資産調査会副会長、横浜市文化財保護審議会委員、横浜市歴史的景観保全委員、建築史学会会長等を歴任。「日本の盛期モダニズム建築像」ほか、著書・訳書も多数。

横浜市景観ビジョン、初の改定

市の景観づくりの指針である「横浜市景観ビジョン」(平成18(2006)年策定)が今年3月に改定された。この改定では「横浜らしい景観をつくる10のポイント」を示し、その1つに「歴史的景観資源の保全と活用による景観づくり」を掲げている。また、横浜を大きく6つのエリアに分け、各エリアでの代表的な景観を断面スケッチで表現。「地域ごとの景観づくりの方向性」をわかりやすく示した。

なお、市民が身近な景観づくりを進める際のヒント集として、別冊「実践ガイ

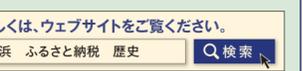
ド」も作成。旧東海道保土ヶ谷宿や、長屋門公園などでの地域の活動事例も紹介されている。詳しくは「横浜市景観ビジョン」で検索。



地域ごとの景観づくりの方向性。(P.54-55)

横浜市ふるさと納税「歴史的景観保全活用事業」を応援してください!

寄附金の使途は、景観上重要な歴史的建造物へのリノベーション助成金や、説明板の設置・更新です。昨年度には寄附金の一部を使い、馬車道大津ビル(中区南仲通)などの説明板の修復・更新を行いました。5,000円以上の寄附で、歴史を生かしたまちづくりの広報冊子を差し上げています。(現在は、主に山手の西洋館を特集した「都市の記憶-横浜の近代建築(II)復刻版」)



都市の記憶-横浜の近代建築(II)復刻版 修復した馬車道大津ビルの説明板